

# 心身への施薬

## ～役行者の『陀羅尼助』と中将姫の『中将湯』～

### 當麻寺中之坊院主の松村師

火曜午餐会・9月第2例会は17日12時15分から当部5階大会議室で開催した。講師に當麻寺中之坊院主の松村實昭師を招き「心身への施薬～役行者の『陀羅尼助』と中将姫の『中将湯』～」をテーマに語って頂いた。松村師は陀羅尼助について「陀羅尼を唱え、薬に功德を込める。陀羅尼助が1300年残っているということは、薬効の成分が身体にも、精神的にも効くとの思いが心にも効いている」と語った。講演要旨は次の通り。

陀羅尼助は、役行者様が作った日本で最古の薬だといわれている。元々は、お寺で施薬を行われていて、薬とお寺は所縁が深い。

厳しい自然の中での山岳修行では、常に怪我や病気がつきもの。その対処に薬草の知識は不可欠だった。薬の知識は、山で修行する者から深まり、そして一般の方にも広まったのがこの陀羅尼助です。

#### 陀羅尼助の由来

「陀羅尼」はインドの昔の言葉「梵語」で、仏さまにお唱えする供養の真言のこと。

陀羅尼助の由来には諸説ある。その一つ、修行中、「陀羅尼」を何千遍何万遍唱える。唱えていけば眠くなってしまいます。お坊さんは、常に陀羅尼助を袂に入れており、陀羅尼助を口に含むと、苦くて目が覚める。ここからこの名前が付いた。俗説ではあるが、広辞

苑にも書いてある。

當麻寺では、薬草を煮詰めて炊く際に、陀羅尼を唱えて作るので「陀羅尼助」だと伝わっている。これは宗教的な意味合いで、陀羅尼の功德を薬に込めるということ。これが1300年間受け継がれていた。

寺内には、役行者様が作ったという釜、水を清められた井戸が残っている。一番水が澄んでいる大寒の時期に井戸から水を汲み、薬草を炊き、一年分の陀羅尼

助を作っていた。しかし、昭和57年に国の基準に合わなくなり、陀羅尼助の製造を中止。その時、當麻町から、當麻の伝統なので、製造を止めても販売だけは続けてほしいと要望があった。現在は一番製造方法が近い洞川から仕入れている。販売前には、必ずお堂に運び、お護摩を焚き、陀羅尼をお唱えしている。

#### 心身への施薬

陀羅尼を唱え、薬に功德を込める。陀羅尼助が1300年残っているということは、薬効の成分が身体にも、精神的にも効くとの思いが心にも効いている。このことが、お寺で薬が残ってきたということ。

平安時代、嵯峨天皇が病気になった際、弘法大師様をご祈祷された。祈祷後は、症状に応じた薬を与えられ治療されたそうです。祈祷が心に、そして薬が身体に効果がある。これが正に、心身への施薬になるということ。

「病は気から」というように、気からの病気ならば気から治さなければ病を根本から治すことは出来ない。薬効の成分だけではなく、祈祷や陀羅尼助に込められた陀羅尼は、病気平癒に対する信念を促すものだと思います。

#### 中将姫

中将姫様は藤原豊成の娘で、幼少より観音様を深く信仰されていた。5歳の時に実母と死に別れ、その後継母に嫉妬され、命を狙わ

れるようになった。その後、宇陀の雲雀山に捨てられ隠棲生活されていた。しかし継母を恨むこともなく、お寺で一番大事にしている「称赞浄土経」を一千巻お写経された。そしてある日、二上山に夕陽が沈む空に、阿弥陀仏が浮かび、空一面に極楽浄土の姿を見られた。そしてその光景に心を奪われ導かれるように當麻寺に入山された。この光景を現し織り上げたのが、国宝で本尊の當麻曼荼羅です。

#### 中将湯の歴史

中将姫様が雲雀山での隠棲生活の際に、お世話になったのが、ツムラ順天堂の創業者である津村重舎の母方の実家・藤村家。そして津村家と交流が始まった。津村家には、中将姫様が當麻寺で知識を学び庶民に施していた薬草の薬

「中将湯」があり、後に東京で販売を始めた。

「中将湯」は婦人薬だったが、社員が製造過程で出た薬草の残り屑を持ち帰り、お風呂に入れてみたところ、香りも良く、肌の調子も良く、そして体が温まった。これがきっかけで、日本で最初の入浴剤としての「くすり湯中将湯」が出来た。

その後、「バスクリン」など様々な入浴剤が研究販売されたが、やはり、原点である生薬で作られた「中将湯」に戻るべきだと、薬効のある成分だけの「バスハーブ」を作られた。

心身への施薬というのは、香りでも心、身体を癒されます。この由来が「中将湯」なのだと思います。いただき、當麻寺、中将姫様、そして陀羅尼助のことを思い出していただければ有難いと思います。

